令和２年７月 経営協議会（オンライン会議）議事録

Ⅰ．日　時　　令和２年７月１６日（木）　１４時００分～１６時２６分

Ⅱ．出席者　　徳久学長、河田、黒木、島田、銭谷、西堀、萩原、
船橋、正宗、宮坂
中谷、渡邊、関、山田、松浦、堀、小澤、中村、米村、
金原、中山、山本各委員

ｵﾌﾞｻﾞｰﾊﾞｰ　　桑古、角各監事
（欠席者：有馬、犬養、岩田、加賀見、香藤各委員）

Ⅲ．前回議事録について
原案のとおり承認された。

議事に先立ち、徳久学長から、７月８日（水）に附属病院において教職員が新型コロナウイルスに感染したが、院内感染を出さず的確に対応している旨報告があった。

Ⅳ．審議事項（◎学外委員、○学内委員等）

１．令和元年度決算について
松浦理事から、令和元年度決算について、資料に基づき説明があり、審議の結果、承認された。

２．令和３年度概算要求について
松浦理事から、令和３年度概算要求について、資料に基づき説明があり、審議の結果、承認された。引き続き、中山副学長から、機能強化の方向性に応じた重点支援の教育研究組織整備及び施設整備費において新規要求する災害治療学研究所の概要について、資料に基づき説明があった。
主な意見は以下のとおり。

◎　このような災害学の研究所というのは全国の国立大学の中にどれくらいあるのか。これは全く初めての提案になるのか。

○　東北大学や広島大学に例はあるが、千葉大学で目指すものは急性期の災害の研究ではなく、数カ月、数年にわたる慢性期も含めた健康被害における治療法の研究である。これまで災害があった時にどのように状態が悪化して、どのような治療をしなければならないかということがあまりわかっていなかった。今回、千葉県というフィールドを使って、千葉県下の関連病院にご協力いただいて、千葉大学の附属病院が中心になって、こういった医療における研究をしようということで、他の災害の研究とは少し違った方向性での研究所を考えている。

◎　今日的な時局を先取りした構想だと思う。千葉県の場合、成田空港があるので航空機災害、直接施設はないが原発の大きな事故があった時に県内にも放射性物質が落ちてきて、その残土の処理もまだできてないが原子力災害、それから臨海コンビナ

ート、石油化学施設等での大きな事故があった時の化学物質による様々な医療的な対応などもあると思う。航空機事故は現場も訓練するし、現地に成田日赤病院や自治医大北総病院がある。原子力災害は放医研があって、だから今回この自然災害というものに焦点を当てた形でやろうということだと思うが、そういった災害の中からどういう事態が起きるかもわからないので、ある程度対応、研究できるようなことは含まれているのか。

○　災害にはいろいろな種類があって、まずは昨年の台風、風水害におけるカビによる呼吸器の疾患、そしてストレスによる基礎疾患、高血圧や糖尿病等の悪化、そういったことを包括するが、次世代災害治療学研究部門でそういったことも含めて研究を行う。全国オープン共同利用ということで設備を整えていろいろな大学の先生がここに来て研究をして、データはクラウドに上げて共有するというようなことを考えている。東北大学や広島大学、災害でいくと自衛隊など、いろいろな所と情報を共有できる基盤をまずここに作りたいというのが最初の数年間の目標ではないかと考えている。

◎　千葉大学が災害治療のメッカになるようにがんばっていただきたい。

○　災害治療というと急性期のことしか皆さん頭の中にないが、その後さまざまな病気、基礎疾患が悪化してくることがわかってきていて、どういう仕組みで悪化するのか、そういう時の治療法はどうなのかということは全く新しい分野と私自身思っている。これからいろいろな災害が起きてくることを考えると、日本に絶対１つは必要だろうと思っている。

◎　出口効果に記載されている災害治療に特化した先端研究とその全国共同利用のところをもう少し充実されて、全国あるいは国内、及び国際共同利用施設の創設とされてはどうか。何も日本人だけでなく、今世界的にいろいろ災害があるので、国際的に台湾、韓国、中国からも受け入れるし、東南アジアからも受け入れるとされてはいかがかと思う。

◎　すでに日本の災害への対応は世界的に非常に高水準で認められていると思うので、世界最高水準の海外教育研究拠点とこの新しい試みを結びつけてアピールをされたら良いと思う。とても素晴らしいアイデアだと思う。

○　看護学の災害看護では、宮崎副学長を初めとして、実際に海外に出向いて日本の災害看護の指導等をされていると聞いている。全体としてはインターナショナルなレベルでの研究をすべきということで、海外の研究者たちも参加できるような枠組にしたいと思う。

３．令和元年度の資金運用実績および令和２年度第１回千葉大学資金運用管理委員会（令和２年５月１３日開催）の報告について

松浦理事から、令和元年度の資金運用実績および令和２年度第１回千葉大学資金運用管理委員会（令和２年５月１３日開催）の報告について、資料に基づき説明があり、審議の結果、承認された。

主な意見は以下のとおり。

◎　こういう形で運用の多様化にご尽力されていることについて敬意を表したい。探してみるといろいろなものがあって、良いチャレンジをされているという感想を持った。千葉大学の運用規模からして、それほどリスクが取れるわけでもないし、リスクとリターンのバランスを取るという観点からすると、長期運用で１％弱位の運用実績というのはそれなりの成果を収めていると認識している。

４．法科大学院認証評価に係る自己評価書について

中谷理事から、法科大学院認証評価に係る自己評価書について、資料に基づき説明があり、審議の結果、承認された。

主な意見は以下のとおり。

◎　数字を見ていて、これで本当に良いのかという気がした。毎年の修了者数と司法試験の合格者数の数字が載っているが、平成 17 年から 22 年頃までは合格率が 70%を超えているが、平成 29 年は合格率が 20%、平成 30 年は 12%。これはいろいろな要因があると思うが、合格率が 20%、12%になってしまって、どのように自己評価しているのか。この人数がピーク時に比べると３分の１以下になっているという現状は、千葉大学の法科大学院に行ってもなかなか合格できないというような厳しい評価を世間から受けているのではないかという危惧を持つ。その辺りをこれからどのようにしようとしておられるのか。

○　実は本学の法政経学部で法学を履修した学生は、一橋大学や東京大学の法科大学院に行ってしまい、あまり本学の法科大学院に入ってくれないという事情がある。協定を結んでいる大学や、あるいは首都圏の私立大学の学生の卒業生が入って来て、彼らを教育してこの合格率にしているというのが事実である。全体として司法試験合格者の枠がだんだん少なくなって絶対数が減ってきていることもあり、これ位の合格率がやっとという状況である。他大学の法科大学院に行かないように本学の優秀な学生に奨学金を支給する等しているが、残念ながらまだこの合格率という状況である。そういう形で努力しているというのが実情である。

○　合格率が低下しているということは紛れもない事実で、何とかしなければならないと我々一同懸命にがんばっている。数字について、先ほどご指摘いただいたところを少し訂正させていただくと、20%、12%という数字は各年度の合格率ではなく、例えば、20%というのは平成 29 年度に修了した学生の累積合格率であって、平成 29 年度の合格率ではない。５回まで受験できるということになっていて、平成 29 年度に修了すればあと３回受験できる。その３回のうちで合格すればこの数字が上がるということになっている。今後、認証評価において、当然この合格率はチェックされる。一つの大きなポイントとして、全体の合格率の半分に達しているかどうかというところを見られる。これは全部クリアしてはいるが、そうは言っても全体的に見て合格率が高くないということは否定できない事実である。次々と他大学で募集を停止しているが、残った大学の中で少しでも良い成績を挙げられるように現在がんばっているところである。具体的には、学部との連携体制を強めること、教育体制の見直し、教員の充実、それからやはり今までは少し宣伝が足りなかったかもしれないと思うので、入試説明会等も充実させて、他にはない千葉大学の法科大学院ならではの良さというものを少しでもアピールしていきたいと考えている。

◎　一番の問題は、良い学生をリクルートしてくることだと思う。そこの努力、先生方

は問題ないわけだから、良い学生をたくさん集めてくるには何をしたらいいのか。そこをもっと努力されたら、上がってくるのではないかと思う。

○　数とか合格率という指標でそのロースクールのあり方を捉えられてしまうと、一旦こういったスパイラルに入っていくと、それを挽回するのは極めて至難の技だと思う。三群を標榜している千葉大学のロースクールと学生に何を求めるかという、その切り口がきっとこういったスパイラルから抜け出す重要なメルクマールではないかと思う。根本的な問題は、どのような学生を世の中に輩出しているロースクールなのかというところで、そこが一番重要だと思う。受け入れるマーケットでその人たちがきちっとした評価を受けて、その評価を受けているということが世の中的に知れ渡って、ロースクールだったら数より良い人間を育ててくれる千葉大学が良いという、そういった循環になってくると千葉大学のロースクールが本当に変わっていけるだろうと思う。

○　数は少ないが私の把握している修了生では、例えば今までは千葉大学からは行っていないような大きなローファームや、今までになかったようなところで活躍している者がいる。また、自衛隊から派遣された者がいるが、自衛隊の法務弁護士というような、非常に将来を有望視されている者がうちの修了生としている。少ない人数であるが、一人一人それぞれ、しかも母校として千葉大学のことを考えてくれている者が活躍しているので、そういう人たちがこれから増えるように私ども一層努力してまいりたい。

◎　この自己評価書を読んで感じるのは、なぜ成績が落ちてきたのか、その理由がはっきりしないのと、それから、ではどうすれば良くなるのかという視点であまり書かれてないことである。やはりこの数値だけを見ると、平成30年度は、あと４回受けられるといっても12.5%しか合格していない。以前は80%が合格していた。今は落ちてきているということは紛れもない事実だと思うので、やはりなぜそうなったのか、これから良くするためにはどうしたら良いのかという具体的な方策をしっかり書かないと。自分の問題点がどこにあるのかを書いていないと思う。

○　それに関しては、なかなかはっきりと書けない事情があると思っていて、客観的な情勢として、やはり予備試験が導入されたということが大きなこの不振の一つの理由になっていると思う。当初予定されていなかった制度がもう一つできてしまったことのダメージはかなり大きい。その中でどうやっていくかという、あまり選択肢はないと思うが、がんばっていかなければいけないという状況かと思う。

◎　学生が予備試験にどんどん流れているが、それに対して千葉大学は全員留学ということで、法科大学院の学生もアメリカの大学に留学させることによって英語が使える、そういう国際弁護士を出す等、何かそういう政策を具体的にやらないといけないのではないか。法科大学院は今どんどん閉鎖しているのが事実であり、無理だと思ったら早く閉められる必要があるかもしれない。全員留学させます、英語ができる弁護士、裁判官を育成します等、何かキャッチフレーズを作られる必要があると感じている。

５．ハドロン宇宙国際研究センターの共同利用教育研究施設化について

中谷理事から、ハドロン宇宙国際研究センターの共同利用教育研究施設化につい

て、資料に基づき説明があり、審議の結果、承認された。

Ⅴ．報告事項（◎学外委員、○学内委員等）

１．学長選考会議の審議状況について

宮坂学長選考会議議長から、学長選考会議における学長の業績評価の結果について報告があった。併せて、今年度実施予定の学長選考の流れ及び求められる学長像について、資料に基づき報告があった。

２．令和元年度卒業生・修了生の進路状況について

渡邊理事から、令和元年度卒業生・修了生の進路状況について、資料に基づき報告があった。

３．附属病院の運営状況について

横手副学長から、附属病院の運営状況及び新型コロナウイルスへの対応状況について、資料に基づき報告があった。

主な意見は以下のとおり。

◎　楽観的な目標は立てない方が良いと思う。ニューノーマルに沿ってやらないといけないし、東京は依然として 100 人、200 人を超える感染者が出ている。世界から見れば日本は良い方だが、行動変容を迫られているのは事実なので、千葉大学として考えなければいけないのは、今まで医学部附属病院の収入におんぶに抱っこをしていた、その構造にあると思う。それを徐々に直していかないと、やはり医学部に全部預けてしまう、収入を期待してしまうというのは少し難しいと思う。今後少し慎重に考えられた方が良い気がしている。

◎　本当に大変な時期に、大変素晴らしい医療活動をしておられると思った。緊急事態宣言は解除されたが、ここ１、２週間の様子を見ていると全く感染の勢いは衰えておらず、また４月、５月のように大学病院に重症の患者さんがたくさん来ることも予想されると思う。そういった状況になると経営的にはまた厳しくなると思うが、どのような対応を考えているのか。

○　東京での感染というのは、感染者数は東京ほどではないが、大体一週間遅れで千葉にも同じ影響が出てくるので注視している。一番心配しているのは、職員や患者さんの中にコロナ陽性の方が出ることで、今回職員の中に２名出て、幸運にも院内感染を起こさずに済んだが、そうとは限らないと思うので、感染者が出た時にも最低限で抑えられるように日頃からの備えを心掛けている。一時期停止した全入院患者さんに対する事前の PCR 検査も行っているので、ここでまず患者さんの陽性を発見する。あとは、もし第一波を凌ぐような患者さんが出てしまった場合、一波の時のように、ある意味行き当たりばったりの対応では病院が対応できないので、現在、千葉県において、軽症の患者さんはこの病院、中等症はこの病院、重症はこの病院というような役割分担で、機能的に患者さんのバランスを取ろうとしている。いずれにせよ経営としては厳しいと思うが、我々としてはできる限り気を緩めずに感染予防しながら求められる診療を行って、できるだけ収支のバランスを取っていきたいと考えている。

○　病院長からお話があったが、私は千葉県の対策本部の専門部会で医療提供体制の取りまとめをしているが、第一波の時はとにかく空いている病院、受け入れられる

病院からどんどん患者を入れていったという事態があった。今回はそれを避けようということで、特に千葉大学病院に関しては重症者、本当にECMOをつながないと助からないような患者さんを重点的に受け入れて、軽症の患者さんに関しては他の病院にお願いするというような体制が出来つつある。幸い国からも病床確保に関する補償金が明確になっているので、経営上の点から二の足を踏んでいた病院もかなり前へラインがそろってきたので、そういう意味では前回よりは計画的に、そして千葉大学病院は本来の医療もやりつつ、コロナの重症者への対応もできればよいというような体制になりつつある。

◎　千葉大学ではコロナ対応を非常にきちんと、先進的に取り組んでおられて感心している。２つ質問があって、１つ目はPCR検査をどんどん積極的にやっているということは院内感染を防ぐのに役立っていると思うが、以前は確か全額自費で、病院の持ち出しで行っていたと思うが、現在はどうなっているか。２つ目は、いくつかの病院で看護師さんが大量に辞めるというようなことが出ているが、千葉大ではどのような状況か。

○　まずPCR検査については、以前は一日大体100検体がリミットだったが、現在は最大200検体まで実施できるようになってきている。そのため、毎日100検体位ずつ入院及び疑いのある患者さんに対して検査している。今は医師が必要と認めた患者さんについては、保険請求ができることになっているので、例外がない限り、全て国に請求しているところである。ただし、これが全て認められて支払われるかどうかというのはまだわからない。措置されることを現在期待しているところである。もう一つ看護師さんについては、最近マスコミで大変話題になっていて、特に東京都内の私立大学では数百人の辞職希望という報道もあった。千葉大学としては、今のところボーナスのカットの見込みはないという情報を流しながら、看護師さん、職員に安心してもらうことも並行して行っていて、現在のところ、例年に比べて離職が増えているようなことはなく、むしろ非常に士気が高く、コロナの部門の人たちが第二波に備えるという意気込みを出してくれていることを耳にしている。

○　千葉大学で今回、トータル60名の患者を受け入れ、職員に２名感染者が出ても横に水平感染が起きていない理由は、職員がマスクの着用と手指衛生という基本的な事項をかなり徹底して守っていることが大きいと考えている。コロナでみんなよく手を消毒するようになったおかげで、他の細菌による院内感染も減っていると聞いている。

○　そのとおりで、これは本当に感染制御部、看護部などの貢献が大きく、繰り返し広報も含めてやっていて、これが習慣化して、風邪をひいたり弱ったりする職員も減っているようなことがあるようだ。感染制御部がかなり力を持って、しかも感染制御部の行うことに対して職員の信頼感が非常に強いと思う。そのため、感染制御部の指示を末端の職員までが守っているということも大きいのではないか。これが他の病院で院内感染が広がるところとの違いではないか考えている。

４．令和２年度夏季特別集中討議（オンラインシンポジウム）について

　中谷理事から、令和２年度夏季特別集中討議は、ポストコロナの大学の在り方をテーマに、オンラインシンポジウムとして開催する旨説明があった。併せて、開催日程等について、あらためて連絡する旨説明があった。

５．新型コロナウイルスへの対応について

中谷理事から、新型コロナウイルスへの対応について、学長を本部長とする新型コロナウイルス危機対策本部を新たに設置した旨報告があった。引き続き、小澤副学長から、メディア授業の現状と今後の課題について、渡邊理事から、本学の学生支援の状況について報告があった。最後に、中谷理事から、文部科学省「学校・子供応援サポーター人材バンク」の概要及び本学学生の千葉市における学習指導員への応募状況について報告があった。

主な意見は以下のとおり。

◎　こちらの大学も５月の初めから授業形態が全部オンラインになっている。９月から第３タームが始まるが、これをどうするかということを今必死に検討している。一部どうしても教室で実習をやらないとできないようなものがあってそれをどうするかというような問題がある。いわゆるオンラインだけでこれからもやっていくか、あるいはオンラインとリアルとハイブリッドにするかということで検討している。結論はオンラインを中心にハイブリッドでリアルも適宜入れていくという方向の方針を出そうとしているが、その際問題になっていることは、本学の場合は 40%位の学生が地方から来ていて、今は全員実家に帰っている。そうすると、オンラインは良いが、実際の授業を行う場合、一週間のうちに１回か２回、あるいは１月のうち１週間まとめて、わざわざ東京へ出てこなくてはならない。寮は今全部クローズしているので、そのために寮をオープンするのか等、授業の根本的な問題ではなくて、その周辺の細かい事情がいろいろある。やはりオンラインとリアルのハイブリッドはなかなか難しいので、しばらくの間はオンラインだけで続けざるを得ないのではないかというのが現状で非常に悩んでいる。

以　上